



事務所 伊那市西町5016-2 TEL(72)0077 例会日 毎週木曜日 会場くぬぎの杜 TEL(78)1121  
 会長 山田 益 幹事 唐澤幸利 会報委員長本田敏和 第3006回 例会2023.10.26 No.1667



世界に希望を生み出そう

2023-24 年度 RI テーマ

CREATE HOPE  
In the WORLD

**ソング** 我等の生業**会長談話** 山田 益会長

さて地元の創業者として、(株)キッツの北澤利男氏の紹介をしたいと思います。氏は1935年に信州大を卒業し諏訪に有った父、北澤國男氏が創業した合名会社北澤製作所に入社しました。入社後まもなく工場長、常務取締役となりましたが社内には3人の叔父が居て中々力を発揮出来ずいた所へ4歳年長の春日光氏が入社しました。そこで利男氏は春日氏と相談しながら別会社独立への準備を進めました。そして1951年34歳で(株)「北澤製作所」が創設されました。後の(株)「キッツ」です。この独立は父國男の了解も得ていました。工場は春日氏を中心に10人の各部門のメンバーが揃い、山梨県の長坂町に地主の協力が有り決まりました。利男氏は「メーカーとして良いものを安く造る」ことをモットーにバルブ製造をスタートしましたが、販売は代理店制度を採用しました。会社を興すに当たって名古屋の大嶽商店の協力を求めています。それからは大嶽商店大嶽誠一社長には大変協力してもらいました。

1960年日本バルブ工業会主催の海外バルブ事業視察に利男氏は45日間の欧米の視察に旅立ちました。イタリア、ドイツ、アメリカなどの工作機械工場を見学して高度に自動化されているのに驚嘆しました。当時の日本の工作機械メーカーでは、外国製に太刀打ちできるバルブ専用自動加工機はなかったので、工作機械のカタログを入手して国内メーカーに試作させたが、出来ませんでした。この時1960年12月期のキッツの売上高は7億4千3百万円でした。利男氏は何事も即断即決、この時総額20億円を超える海外加工機械の導入を決めて初めにイタリア製250トン能力の鍛造機械2台を発注して、黄銅鍛造バルブを完成させ日本市場で発売しました。従来バルブボディは鍛造が国内では一般的でしたが、上下左右



から一回で成型されるバルブボディは、軽量、奇麗でコストが下がり大ヒットとなりました。これで海外からの輸入バルブはなくなりました。

その後1973年本社長坂工場が狭くなったので伊那地区への工場建設が計画され、伊那市の協力も得られて伊那工場が完成しました。伊那工場では鉄鋼V、ステンレスVなどが製造されて日本一のバルブメーカーのスタートとなりました。工場排水については伊那市の要望に沿って、天竜川まで2kmを専用のパイプを埋設して浄化され排水しています。1973年第4次中東戦争が起こり、国内では第1次オイルショックで狂乱物価となり大不況となりました。そして1976年父、北澤國男氏が創業された国内トップの「東洋バルブ」が881億円の負債で倒産しました。世間では長男である利男氏の「キッツ」も危ないと騒がれましたが、1976年暮れの東京株式市場大納会が終った後、利男氏は東京市場2部上場企業「不二家電機」との合併を発表しました。通常株式市場に上場するには3~4年掛かると言われていましたが、キッツは東京株式市場上場企業となりました。「裏口上場」と言われましたが北澤利男氏は何のコメントもしていません。

**誕生祝**

塚越 寛・小林孝行  
都築 透・宮下金俊  
笠井俊朗・吉田秀樹

**結婚記念日祝**

山田 益・立石 誠  
藤澤秀敬・飯島松一・倉沢範行

**在籍祝**

塚越 寛(33)・中川博司(33)  
都築 透(28)・山崎秀亮(7)  
登内豊明(4)・飯島松一(2)



## 入会式

いちよし証券㈱ 伊那支店長 松平 歩様

紹介者 増田 清会員

昭和42年生まれの56歳です。伊那の街がとても好きになりました。今後ともよろしくお願ひ致します。



**幹事報告** 別紙をご覧ください

**出席報告** 会員数57名 内出席免除者20名  
出席者26名 事前メーキャップ2名 出席率62.22%

## ニコニコボックス

- ・山田 益 松平様ようこそ。今後ともよろしくお願ひします。
- ・松平 歩 本日からよろしくお願ひ致します。
- ・宮下 裕 久し振りに来ました。
- ・八木 真真 はしばコーポレーションは創業10周年を迎えました。
- ・飯島松一 監督しているバレーボールチームが県大会で優勝しました。
- ・倉沢範行 本日卓話をさせていただきます。
- ・ゴルフ部

ラッキー賞

唐澤幸利・宮下 裕  
小松献臣・矢島 豪  
唐木 章・平澤泰斗  
本田敏和



## 会員卓話 倉沢範行会員

演題-「私の履歴書」

私の趣味と呼べるものに、ちっとも上達することのないゴルフと、イワナに特化した溪流釣りに加え、約10年前に始めた主に猟銃による狩猟がある。私は手続きを一つ一つ進め、猟銃所持許可と狩猟免許を取得し、ようやく猟銃を購入した。

そんな折、私の住む村内で事故が発生した。畑に成獣の熊が出没し村内を縦断しながら、途中農作業中の女性を襲い、その後も逃走を続け最終的には牛舎に逃げ込んだ。その際に熊を追い詰め駆除したのが村の猟友会のメンバーたちであった。なお、途中襲われた女性は、命に別状はないものの頭部を引掻かれ、重傷を負った。

この事故を知った私は、取得した資格で自らの趣味を楽しむ一方、猟友会に入会し村内の鳥獣対策にも貢献したいと考えるようになり、猟友会の総会で私の入会を推薦いただけることとなり、無事仲間入りを果たすことができた。

それ以降、毎年5月から9月は有害鳥獣駆除に参加し、11月から2月は趣味としてキジやカモなどの鳥猟や、猪や鹿などの大物猟を猟銃により



楽しんできた。さらに3年前には地元猟友会の役員になったことから、罨免許も必要となり取得した。これにより狩猟の可能性が大きく広がった。狩猟について、以前は周囲の皆さんからは「遠い世界のこと」と思われていた感があったが、ジビエブームもあり、最近では「割と身近な興味深い趣味」と捉えられている感があるということ。

また、猟友会に対しても昔は「どちらかという野蛮な癖の強いおじさんたち集団」と捉えられていた節があったが、近年は「鳥獣被害から住民とその財産を守ってくれるエキスパート集団」と受け止めていただいていると感じられる。村が開催する鳥獣被害対策協議会などに出席した際、農家の皆さんから多くの感謝の言葉をいただくと、「我々の社会的存在意義は高くなってきている」と心から思える。せつかく地域の皆さまから必要性を感じていただくようになった猟友会だが、そこに水を差すような事件が発生した。ご承知のとおり5月に中野市で発生した猟銃立てこもり事件である。

この事件では警察官2名を含む4名の尊い命が犠牲となり。犯人は地元猟友会に所属していたことが分かっている。報道によると犯人は猟友会活動にはほとんど参加していなかったことや、猟銃を合計4丁(マニア的に)所持していたことなどが明らかになっており、私の所属する猟友会のメンバーとは違うと思うものの、今後3年に一度の猟銃の所持許可更新や、その際に実施される警察官による保管状況確認などが強化されることが想定される。

また、世間には猟友会や狩猟そのものを好意的に思っていない方も少なからず見えるなかで、これまでも一定規模あった、例えば山中で狩猟をしているにも係わらず「鉄砲を持っている人が近所を歩いている」といった警察への通報や、有害鳥獣駆除中の駐車車両へのいやがらせも増加する可能性もある。

このような逆境の中にあって、我々はどうのように対応していくべきなのか。まずは個々人が絶対に事故は起こさないという強い信念のもと、法律に則った銃や罨の取り扱いを徹底することはもちろんのこと、普段から地域のボランティア活動に参加したり、地区の役職を務めるなど周囲の信頼を得ておくことも重要であると考えます。そのうえで、猟友会員相互が注意喚起を図ることで、組織としても成長を続けていくことが不可欠だと思ふ。

引き続き個人として狩猟を楽しむとともに、猟友会としての社会的使命を全うしていくためにも、時代にあわせたアップデートを重ねていくことを約束申し上げ、卓話と致します。